

ISSN 2186 – 3989

古典日本語における助動詞によるテキスト構成を
めぐって
—古典教育への応用を視野に—

坂田 一浩

About Classical Japanese Text Construction by Auxilliary Verbs
- In the Light of Application to Its Teaching -

Kazuhiro Sakata

北 陸 大 学 紀 要
第55号(2023年9月)抜刷

古典日本語における助動詞によるテキスト構成を めぐって

—古典教育への応用を視野に—

坂田 一浩*

About Classical Japanese Text Construction by Auxilliary Verbs
- In the Light of Application to Its Teaching -

Kazuhiro Sakata*

Received August 3, 2023

Abstract

This paper aims to analyze text construction by auxilliary verbs in classical Japanese.

First, we propose classification models for these auxilliary verbs from the perspective of witness evidentiality (Menomae-sei). Based on this models, auxilliary “tari” is categorized into witness evidential one, that is, describing events in front of speaker, in contrast, auxilliary “mu” is non witness evidential.

Second, through the consideration of some exemples, we confirmed that auxilliary verb “keri” indicates viewpoint of the narrator, whereas auxilliary “tari” that of characters of the story. And in some cases, the narrator describes foreground event using “tari” or “ki”, by contrast, background one is explained by “keri”. This means both auxilliary verbs construct the perspective of narrative.

Finally, in “Amayo-no-Shinasadame” of the Tale of Genji, we find out the functionai relationship between auxilliary “ki”, “mu”, and basic form of verbs. There, “ki” is used when characters tell their own experiences, “mu” used for telling general facts, and basic form of verbs used when narators explain the truth using metaphors. Also we confirmed that the way of using auxilliary verbs reflects buddhism preaching style in this short story.

Key Words : evidentiality, functional relationship between auxilliary verbs

* 北陸大学経済経営学部 (学外講師) Faculty of Economics and Management, Hokuriku University (Faculty Extramural)

はじめに—問題の所在と本論の意図—

一般に古典日本語の文学作品は、源氏物語など平安朝の諸作品に典型的に現れているように、テキストを構成するにあたって助動詞がきわめて重要な役割を果たしており、その構成のありよう、具体的には、そこに現れたいくつかの助動詞の相互連関をいかに読み解くかが作品の解釈の当否を大きく左右する。このことはこれまで蓄積された先行研究が夙に示すところであり¹、筆者もこの問題に関するいくつかの論考を発表してきた。

本稿ではこのような助動詞によるテキスト構成のありようを「めのまへ性」という概念をひとつの指標としつつ、助動詞相互の機能的連関に着目して解析し、さらに教育現場における古典解釈への応用も視野に入れながら考察してゆくこととする²。

一、「めのまへ性」とは？

「めのまへ性」とは、拙稿（坂田 2009）において述べたように、通常、過去・完了・推量の名の下に分類されている一群の古代語助動詞に対する、新たな分類の枠組みとして筆者が提示した概念である。私見では、「き」「けり」「たり」「む」などの古代日本語の助動詞を分類する際、過去・完了・推量、すなわち欧米語由来のテンス・アスペクト・ムードの枠組みで捉えることは、これらの助動詞が本来持つ語性や機能を見誤るおそれがあると考ええる。古代語の実態に即して見る限り、当該助動詞においては、それが述べ立てる事態が発話時点において話者の眼前で生起している出来事か、そうでないかが重要であり、それらの分類もこれに基づいてなされるべきである、と筆者は主張する。これを端的に表す概念が「めのまへ性」であり、前者の場合、すなわち話者の目の前で起きている事態を述べ立てる助動詞を「めのまへ助動詞」、それに対して後者を「非めのまへ助動詞（あるいは、思ひやり助動詞）」と呼ぶことにする。次節において双方の助動詞の具体例を挙げることにより、めのまへ性を助動詞分類の枠組みとして主張する根拠を示すこととする³。

二、「めのまへ性」という枠組みによる、古代語助動詞の分類

まず典型的なめのまへ助動詞として、

①松の木を並みたる（多流）見れば家人のわれを見送ると立たりしもころ（万葉 4375）

②もしきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてここに集へる（万葉 1883）

上の例のような「たり」「り」が挙げられる。ことに上代における例では、「たり」「り」が①のように知覚を表す「見れば」や（初二句は「松の木が並んでいるのを見ると」と解せる）、あるいは②のように現場性を示す「ここ」と共起（つまり「梅をかざして」「集へる」のは詠者の眼前の景である）しているものを数多く確認することができる⁴。

他方、助動詞「む」は

③わが里に大雪降りり（落有）大原の古りにし里に落らまく（落巻）は後

（万葉 103）

④秋さらば今も見るごと妻恋ひに鹿鳴かむ（将鳴）山そ高野原の上（万葉 84）

上の例のように発話者の眼前にない事態を思い起こして述べ立てる際に用いられるものであるといえる。③の例では、「落らまく」は「落らむ（＝降らむ）」のク語法、すなわち体言化した語形であるが、初二句の「わが里に大雪降りり」では「り」を用いて眼前事態を述べ立てているのに対し、三句目以降の「大原の古りにし里に落らまく」は同様の事態（＝降雪）が大原では今よ

りも後のことになること、すなわち目の前にない、未実現の事態として、「いま・ここ」の「わが里」での事態と対照させつつ述べられている。次の④の例は多少複雑である。ここでは、「む」が承ける「妻恋ひに鹿鳴」くという事態は「今も見るごと」とあるように詠者にとっての眼前の景であるが、それが「秋さらば」、すなわち秋になった時を想像して、その時も今と変わらぬ景であることを思い浮かべているのである⁵。

次に、一般に過去を表すとされる助動詞「き」は、

⑤吾妹子が植ゑし（之）梅の樹見るとにこころむせつつ涙し流る（万葉 453）

⑥昨日こそ君はありしか（然）思はぬに浜松が上に雲とたなびく（万葉 444）

上の例が示すように、それが述べ立てる事態は「む」と同様、今眼前にはない事態であるが、「む」と違うのはそれが、発話時以前に起こった事態、さらに直接経験の用法の場合は「以前発話者が目の前にし、かつ発話時では眼前にない事態」という点である。上の例はいずれも直接経験を示すものであるが、⑤の「吾妹子が植ゑし」、⑥の「昨日こそ君はあり」はいずれも発話時以前に表現主体が目にした光景である。

このようにみるならば、「たり」「り」は発話者が今日の前にしている「今めのまへ」事態を、「き」は以前目の前にしていた（そして今は目の前にない）「元めのまへ」事態を、それに対して「む」はまだ目にしていない「未めのまへ」事態を表す、というように、これまで完了・過去・推量と、違うカテゴリーに分類されていた「たり（・り）」「き」「む」が、めのまへ性という枠組みによって統一的に捉えることができるのであり、これがむしろ、古代日本語の事態把握様式に沿った理解であると考えられる。

次に助動詞「けり」と「らむ」を取り上げる。学校文法では前者は「過去」、後者は「推量」の助動詞に分類されているために、相互の関連性には注意が払われることが少ないが、めのまへ性という観点から改めて捉え直してみると、ある共通性が浮かび上がってくる。

まず「けり」は一般に、

⑦・・・千沼壮士 菟原壮士の 伏せ屋焚き すすし競ひ 相よばひしける（家類）時には・・・（万葉 1809）

⑧はだ薄久米の若子が座しける（家留、一云「家牟」）三穂の石室は見れど飽かぬかも（万葉 307）

のように、伝説などの伝聞事態を語る際に用いる、いわゆる「間接経験の『けり』」と、

⑨田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける（家留）（万葉 318）

⑩物思ふと隠らひ居りて今日見れば春日の山は色づきにけり（家里）（万葉 2199）

のような、発話者が新たに発見した事態を述べ立てる、いわゆる「気づきの『けり』」との二つの意味用法があるとされるが、それぞれの用法を今、めのまへ性の観点から捉えようと、前者は発話者が直接目にしていない「非めのまへ用法」であるのに対し、後者は⑨では「見れば～ける」、また⑩では「今日見れば～けり」とあることから分かるように、眼前事態についての発見を表すものとみられる。つまり「けり」はめのまへ、非めのまへ両方の事態を述べ立てることができるのである。

次に「らむ」の例をみると、

⑪嗚呼見の浦に船乗りすらむをとめらが玉裳の裾に潮満つらむか（良武香）（万葉 40）

⑫雪のうちに春は来にけりうぐひすのこほれる涙今やとくらむ（古今 4）

のように発話時点に生起しているであろう出来事でありながら、発話者が直接目の前に見ることのできない事態（遠隔地で起きている事態であることをその典型とする）を思いやる、いわゆる「現在推量の『らむ』」と

⑬我が君はわけをば死ねと思へかも（念可毛）逢ふ夜逢はぬ夜二走らむ（良武）（万葉 552）

⑭ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ（古今 84）

のような、眼前の事態についてその原因を推量する（⑬の例では「逢ふ夜逢はぬ夜二走る」、つまり「我が君と逢えたり逢えなかったり」という事態、また⑭では「光のどけき春の日にしづ心なく花の散る」がそれぞれ「めのまへ事態」だと見られる）、いわゆる「原因推量の『らむ』」との二つの用法があるとされるが、これもさきほどの「けり」の場合と同様に捉え直してみると、前者は「非めのまへ事態」、後者は「めのまへ事態」を述べ立てるものであり、したがって「らむ」も「けり」と同様、その用法はめのまへ・非めのまへの両方に跨っていることになる。両助動詞のこのような振る舞いも、めのまへ性という観点からそれぞれの助動詞の語源に遡って考えてみると、決して単なる偶然ではないことがわかる。すなわち、「けり」は「来・あり」が熟合して成立したものだとする説が有力であり、一方の「らむ」は、「あら・む」の「あ」が脱落して出来たものだとする説が広く受け入れられている。これを今仮りに、「来—あり—む」と図示してみると、両者は「あり」を共通の語基としてもつことが見てとれる。実はさきに、めのまへ助動詞として挙げた「たり」「り」も、「あり」を語基として含むものであり（「たり」は「て・あり」の熟合形、「り」は「咲き・あり」→「咲けり」のように、元来四段・サ変動詞連用形と「あり」が熟合してできたものである）、さらに後述する他のめのまへ助動詞「めり」と推定の「なり」いずれもがやはり「あり」を語基として含むことを考え合わせると、古代語において、「あり」はめのまへ性のメルクマールとして機能していたのではないかとの推測も成り立つのである。

このようにみえてくると、「けり」「らむ」がめのまへ助動詞としての用法をもつのはその語基としての「あり」によるもの、また非めのまへ助動詞としての用法は「来」「む」に由来するものとみることができるであろう。以上述べたことを図示すると以下ようになる。

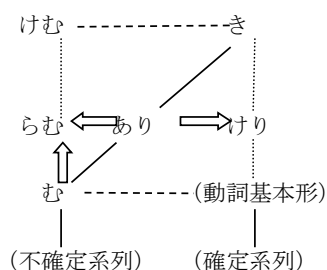


図1) めのまへ性に基づく古典語基本助動詞の相関図（坂田一浩 2020 より）

すなわち、図中「き—あり—む」を結ぶ斜めの直線は順に、「元めのまへ—今めのまへ—未めのまへ」の系列を示し、「む」と「あり」からそれぞれ矢印を伸ばし、それらが交わる点に「らむ」を置く。これは「らむ」が「あり」「む」の熟合から成り立つことを示すとともに、「あり」から伸びる矢印を軸とする水平線は発話時における「現在」の系列を、また「む」から伸びる矢印を軸とした垂直線は事態に対する「不確定さ」を示す系列（不確定系列）として位置づけられる。その線の上に「む」「らむ」があれば当然、それをさらに延長した線と、「き」から伸びる水平線（これは発話時からみた過去の系列を意味する）とが交わる点には、いわゆる過去推量の「けむ」が位置することになる。また図の中において、「き」から下に垂線を下ろすとそれは、上に述べた不確定系列を示す線と平行になるが、これは発話者が直接目の前に経験した、確実に生起したと捉える事態を述べる、助動詞「き」に発することからみても、不確定に対する「確定」の系列を示すものであることが予想されるが、はたしてこの線と、「あり」から右に伸ばした矢印との交点には、確定事態の述べ立てにあずかり、かつ語基に「あり」を含む助動詞「けり」が位置することになろう（ここで「けり」の語源を、助動詞「き」と「あり」との熟合とする説に従えば、「き」からも矢印を伸ばすこととなり、「む」との関係でいえば非常にシンメトリカルな図式となるが、前に述べたように現今では「来・あり」の熟合とみる説が有力であることから、

今はあえてこの見方は取らない)。

このように見てくると、図の右下、つまり確定系列の線と「む」から右に水平に伸ばした線との交点が空座となるが、ここに入るべきものは何かないだろうか。すなわち、図の意味するところからして、確定事態にして「む」が述べ立てる事態と同じく、発話者がまだ目の前にしていない、あるいはまだ実現していない事態を述べ立てるもの、ということになるが、ここにはおそらく、動詞の基本形が位置するものと思われる。現代語の動詞基本形(辞書形、あるいはル形)は、未実現の事態、あるいは一般化・概念化された事態を述べ立てるとされるが⁶、古代語でも基本的にこの点は同様であったと考えられる。

以上のように、めのまへ性という枠組みを用いることによって、これまでの捉え方では見えてこなかった、古代語助動詞相互の意味的連関が明らかになるように思われる。次節ではさらに、いくつかの助動詞についてこの点を確認してゆくこととする。

三、「たり」と「けり」によるテキスト構成

本節以降では前節で提示した、めのまへ性という視点に基づいた枠組みをもとに、いくつかの助動詞の間にみられるテキスト構成機能の相互連関について具体的に確認することとする。本節ではこのうち、物語文学作品においてしばしばみられる、「たり」「けり」共起とその機能的連関について、平安前期散文作品の四つの例をみてゆく。最初に挙げるのは、竹取物語の冒頭部分である。

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒のなか光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてみたり。

物語は冒頭、まず「けり」で語り始められる。その昔、竹取の翁という者がいたこと、その生業、さらにその名前が次々に「けり」を文末にもつ文で語られた後、「もと光る竹」の存在を述べる箇所までは「けり」が続く。ところが、それを境に以降のセンテンスの文末は突如、「筒の中光りたり」と、「たり」に転換する。この、「けり」から「たり」への転換は、これらの助動詞を、従来通り、それぞれ「過去」「完了」と理解していたのでは説明できないものである。そこでは冒頭のセンテンスから続いてきた、語り手の視点による非めのまへ事態としての「けり」叙述から、「寄りて見るに」を境として視点が竹取の翁に移動、翁の視点に寄り添う形で、翁の目から見た光る竹と三寸ばかりなる人が、めのまへ事態として「たり」によって描写されているのである。

次に伊勢物語の例を挙げる。

むかし、男、逍遙しに、思ふどちかいつらねて、和泉の国へ二月ばかりにいきけり。河内の国、生駒の山を見れば、曇りみ晴れみ、立ちゐる雲やまず。朝より曇りて、昼晴れたり。雪いと白う木の末にふりたり。それを見て、かのゆく人のなかに、ただひとりよみける。

きのふけふ雲の立ち舞ひかくろふは花の林を憂しとなりけり (伊勢物語・67段)
一見、「けり」「たり」が混在し、叙述の統一性を欠いているような印象を受けるが、ここでもさきの竹取物語の例同様、「見れば」「見て」が「たり」の前後に現れていることに着目すれば、次のような構造が見て取れるであろう。

むかし、男、逍遙しに、思ふどちかいつらねて、和泉の国へ二月ばかりにいきけり。河内の国、生駒の山を見れば、【曇りみ晴れみ、立ちゐる雲やまず。朝より曇りて、昼晴れたり】。

雪いと白う木の末にふりたり】。それを見て、かのゆく人のなかに、ただひとりよみける。
すなわち、下線部「見れば」を境として、その直後からは物語の現場の視点に立って眼前の景物

が描写される。このような「めのまへ」事態の述べ立てとして、ここでは「たり」が機能しているのである。また、【】内の「たり」叙述部の直後に下線部「それ」が位置し、その一文は「けり」で閉じられていることにも着目したい。ここでの「それ」は直前の、「たり」による一連の描写を一步退いた視点から眺める、いわばズームアウトの役割を端的に示しており、視点の転換を行うものとして機能している。それを承けてはじめて、再び語り手の視点による「けり」を用いた叙述が可能となるのである。

以上述べたことは学校での古典教育、とりわけ作品講読のありようを考える場合にも一つの示唆をもたらすかもしれない。単に個々の助動詞の意味用法を個別に説明するにとどまることなく、ここに述べたような異種の助動詞相互の機能的連関に注意を向けつつ読み進めることは、学習者の作品に対する「複眼的な読み」の力を養う上でも有益であろう。

さて、次に挙げるのは蜻蛉日記の例である。

かくて、つれづれと六月になしつ。東おもての朝日のけ、いとくるしければ、南の廂にいでたるに、つつましき人のけちかくおぼゆれば、やをらかたはら臥して聞けば、蟬の声、いとしげうなりにたるを、おぼつかうてまだ耳を養はぬ翁ありけり。庭はくとして、箒もちて、木の下にたてるほどに、にはかに、いちはやう鳴きたれば、おどろきてふりあふぎて言ふやう、「よいぞよいぞといふなは蟬来にけるは。虫だに時節を知りたるよ」とひとりごつにあはせて、しかしかと鳴きみちたるに、をかしうもあはれにもありけん心ちぞあぢきなかりける。(蜻蛉日記・天禄三年六月 237)

ここでは、下線で示したように「たり」叙述を基調とする中で、それに囲まれる形で「けり」が突如現れている。そもそもここでの「たり(り)」は、体験時における記主にとってのめのまへ事象を描写するものとして機能している。その中に現れた「けり」は、物語冒頭における人物紹介と同様、以降の叙述において注目すべきものの出現を述べており、ここでそれまで伏在事象であった翁がふと目に入ってきて認識され、記主の意識にのぼってきたことを示しているものと考えられる(まさに語源の「来・あり」であり、めのまへ・非めのまへの両方を併せ持つ特徴である)。そして、後続の「木の下にたてる」では、直前の文において「けり」で紹介された、その同じ翁の挙動が今度は「り」で述べ立てられ、一見直前の「けり」叙述と齟齬をきたしているように見えるが、これは記主の意識にのぼり、さらに意識になじんだ後での翁の眼前での挙動を述べたものと考えれば、ここでの「けり」から「たり」へのスイッチの切り替えは極めて自然な叙述の流れと捉えられよう(ちなみに新大系本、および同じ校注者による岩波文庫本は、この「けり」の直後を読点とする。従うべきであろう。いわゆる「はさみこみ」ととらえた上で、「翁ありけるが」の心もちで後に続くものとみるべきであろう)。

そして用例末尾「なかりける」の「ける」において記主の視点は体験時の現場から離れ、語りの「今」の時点、すなわち本作品の記載時に戻り、記載時の視点からこれまでの叙述を俯瞰的に眺める形をとる。いわば「けり」が、ズームアウトの役割を果たしているのである。

最後に土佐日記の例を挙げる。

ある人の子の童なる、みそかにいふ、まろこの歌のかへしせむといふ。驚きて「いとをかしきことかな。よみてむやは。よみつべくばはや、いへかし」といふ。まからずとて立ちぬる人をまちてよまむとて求めけるを、夜ふけぬとにやありけむ、やがていにけり。そもそまいかがよんだるといぶかしがりてとふ。この童さすがにはぢていはず。しひてとへばいへるうた、

ゆく人もとまるも袖のなみだ川みぎはのみこそぬれまさりけれ

となむよめる。(土佐日記・一月七日)

ここでは一つの場面の叙述が動詞基本形、「けり」、「り」の三つの形態によってなされているが、このうち特に「けり」による叙述をどう捉えるべきか。ここで描写の対象となっているのは童と、「まからずとてたちぬる人」の二人であるが、当該場面のメインの人物である童(童の歌と、それへの讃嘆がこの場面の核をなす)の挙動が前景に、それとの対照で「立ちぬる人」はいきおい、

背景に退いている。そして「けり」は、前景の影で伏在する事態としての後者を述べ立てているのである。これは「けり」が背景事態を挿入句のごとく述べ立てる例で、前に挙げた伊勢物語の例とは対照的な構成をなしている。今「けり」による叙述部分を、

ある人の子の童なる、みそかにいふ、まろこの歌のかへしせむといふ。驚きて「いとをかしきことかな。よみてむやは。よみつべくばはや、いへかし」といふ。＜まからずとて立ちぬる人をまちてよまむとて求めけるを、夜ふけぬとにやありけむ、やがていにけり。＞そもそもいかがよんだるといぶかしがりてとふ。この童さすがにはちていはず。しひてとへばいへるうた、

ゆく人もとまるも袖のなみだ川みぎはのみこそぬれまさりけれ
となむよめる。

のように括弧に入れると、そのような構造がより見やすいものとなるであろう。

以上みてきたように、平安時代の散文作品においては「たり」「けり」が叙述上有機的に連携することで、視点を転換し、あるいは前景⇄背景という、場面上の奥行きをもたらすものとして機能しているのである。また、本節においてあえて異なる作品を挙げたのは、助動詞の機能連関のありようにつき、作品相互を比較対照することが今後の研究において必要であると考えからである。作品の講読にあたっても、このような助動詞の織り成す遠近法に目を向けるべきであろう。

四、「き」と「けり」によるテキスト構成とその表現効果—堤中納言物語「このついで」を例に

本節では「き」と「けり」のテキスト上における機能的連関について考察するが、その具体例として堤中納言物語の「このついで」の第一話を取り上げる。本話では両助動詞が交錯する形で現れており、従来からその使い分けの原理がどのようなものであるかが問題とされてきた（森正人 1979）。ここではそれをどう解きほぐすかを一つの試みとして提示してみたいと思う。まず原文を引用する。

ある君達に、忍びて通ふ人やありけむ、いとうつくしき児さへいできにけれ①ば、あはれとは思ひきこえながら、きびしき片つ方やありけむ、絶えまがちにてあるほどに、思ひも忘れず、いみじうしたふがうつくしう、時々は、ある所に渡しなどするをも、いまでも言はでありし<1>を、ほど経て立ち寄りたりしか<2>ば、いとさびしげにて、めづらしくや思ひけむ、かきなでつつ見あたりし<3>を、え立ちとまらぬことありていづるを、ならひにけれ②ば、例のいたうしたふがあはれにおぼえて、しばし立ちどまりて、「さらば、いざよ」とて、かきいだきて出でける③を、いと心ぐるしげに見送りて、前なる火取を手まさぐりにして、

こだにかくあくがれ出でば薫物のひとりやいとど思ひこがれむ
と、しのびやかに言ふを、屏風のうしろにて聞きて、いみじうあはれにおぼえけれ④ば、児もかへして、そのままになむ居られにし<4>と。
いかばかりあはれと思ふらむと、おぼろけならじと言ひしかど、誰とも言はで、いみじく笑ひまぎらはしてこそやみにしか。

以下の説明の便宜上、「き」は括弧付きの数字で、「けり」は囲み数字でその出現順を示しているが、本題に入る前にまず、「き（し）」<1>を含む下線部、「ときどきは・・・いまでもいはでありしを」、特に「いはでありし」の動作主が誰かという点について検討してみる。以下の議論において重要なポイントとなるからである。この下線部の解釈につき通行の注釈書では、「子ども

は『もうお母さまの所へ帰る』などとはひととも言わないでいた」（新全集）、「子どもが『もう母さんの所へ帰る』とも言わないで。姫君が『早く子どもを戻して』とも言わないで、とも」（新大系）、「はやく戻して」「[姫君は]言わないでいたが」（新潮古典集成）など、子どもあるいは姫君の言動とするのが一般的なようである。しかし私は、本話全体のテキスト構成の観点から、そのような解釈に違和感を覚える。結論を言えば、ここは実は、男の言動を述べているのではないか、あるいは百歩譲って子どもの言動とする解釈は多少存立の余地があるにせよ、姫君のそれではあり得ない、と考える⁸。そう判断する根拠は以下の四点である。

- ① 本挿話冒頭より「かきいだきて出でけるを」までの動作は全て男または子で統一されており、この箇所だけ姫君の言動が顔を出すのはいささか唐突かつ奇異である。姫君の言動は「見送りて」に至ってはじめて描写される、という構造を取っている。
- ② ここを除いて、この挿話で「き」で述べ立てられるのは全て男の言動であり、このみ姫君（あるいは子ども）とするのは疑問。
- ③ 「いみじうしたふがうつくしう」という“文”修飾の注釈的成分の係り先が準体“句”「ある所にわたしなどする」ではあまりに手前に落ちすぎる。やはり「言はでありし」まで広く係り先が及ぶとするのが穏当で、そうすると「今などもいはでありし」なのは「いみじうしたふがうつくしう」なのだから、この措辞が現れている理由も明確になる。
- ④ 「ほどへてたちより」は男の視点からの措辞であり、その直前の「いはでありし」が姫君の動作に基点を置いているというのは少々ちぐはぐな印象を受ける。

ところで、これまで本話中の一節の解釈につき縷々述べてきた理由は、それが本話のテキスト構成、より具体的にはそこにみられる「き」「けり」の使い分けの原理に密接に関わる問題だからである。本話の「き」「けり」の使用に関しては森正人(1979)では両者の混同が指摘され、それに関して塚原鉄雄(1979)は、そこに明確な使い分けの原理が存在することを指摘している。筆者も塚原同様、明確な使用区分の原理が存在したと考えるものだが、氏の論に対しては少々異論がある。氏の論の骨子は、「このついで」第一話は基本的に「き」が統括する世界で、他方「けり」が承ける句は、それに対する解説や理由説明などの挿入表現として機能している、という点にあるとみられる。本話は男とその通い先の女、そして両者の間の子が主要な登場人物となって物語が展開していくが、上述の通り「き」は男の言動にのみ用いられ、女の言動に用いられることはない。一方で「けり」は前半部では①②のように子に関わる事態の述べ立てに用いられる。このように見るならば、本話では基本的に男がメインの登場人物となっており、女と子は背景に退いた事象となっているものと想定される。

この点を念頭に置いた上で考えるに、本話における「き」「けり」の使用に関して最も理解に苦しむのは、冒頭から一貫して「き」で述べられていた男の言動が、「かきいだきて出でける③を」に至って突如「けり」で述べ立てられ、「けり④」を経て、結末では再び「居られにし<4>」と「き」に戻るという不可解な交替が見られる点で、塚原説はその理由を明快に説明するものとはなっていないように思える。そもそも、文中にみられる三つの「ければ」はいずれも「ば」のはたらきによってはじめて、理由説明の挿入表現たり得ているものとみられ、他方「ける③を」は後続の「見送りて」の客語格ともみられ、挿入表現とするには少々抵抗を感じる。

この問題に関して以下述べるのはあくまで一つの試案だが、前節で挙げた土佐日記の例における背景事態提示の「けり」の用法、すなわち竹岡正夫(1963)の言うところの「物語のあなたなる世界」を叙述する「けり」という捉え方を援用すれば、次のように説明できるであろう。

まず掲出本文の「き(し、しか)」<1>～<3>では男の言動が一貫してメイン、すなわち前景事態として述べられている。また、対する「けり①②」はいずれも子どもについての述べ立てとして機能しているが、これらは伏在する、背景事態を提示したものとみられる(「けり①」の一節

では子どもの出生が添加の「さへ」で取り立てられているが、これも背景事態であることを裏付けられるものかと思われる)。

それが一転、「かきいだきて出でける③を」と、男の動作が「けり」で表されているのは、ここで男の存在・言動を背景に退かせ、代わって姫君の言動を前景に押し出すための巧妙な「仕掛け」であると考えられる。姫君が前景に出てくるのは以下にその詠歌が語られるため、歌徳説話の様相を呈する本話では歌を詠むことにまつわる言動はどうしても前景として語らざるを得なかった、ということに尽きるかと思われる(ちなみに、「かきいだきて出でけるを」と男の動作を準体句として客体化し、それを対象とした姫君の「見送る」動作を述部に据えた構文も、男の動作を背景に押しやる仕掛けの一つとみられる)。以下「火取を手まさぐり」「しのびやかに言ふ」と、姫君の言動が続き、次に出て来る男の言動「いみじうあはれにおぼえけれ④ば」も依然、背景事態として描写されている。実際その直前の「屏風のうしろにて聞きて」は、まさにそれが影の出来事であることを端的に示しているかと思われる。そうして詠歌の顛末を語り終え、最後、その徳の現れとしての「姫君宅への男の定着」は一話の要であるから「き」で語られる必要があった、そこで男の動作は再び「き」叙述に戻る、という表現機構かと考えられる。

こう考えてきた上で再び冒頭の問題に戻ると、やはり前半部分、男の言動の描写が基調となっている個所で「いはでありし」が姫君の言動として顔を出すのは、本話の語りの効果を大きく削ぐもののように見受けられる。姫君の言動は、あくまで歌の徳にまつわるクライマックスの個所に至って初めて描写されるべきものかと思われるのである。このように、本話では「き」「けり」をスイッチのごとく適宜切り替えることにより、スポットライトの照射対象の転換を巧みに行っているのではないかとみられる。

以上のようにみてくると本作品の行文は、単に当時の実際の語りをそのまま写したといったものではなく、その口吻は忠実に伝えながらも、書記作品としてかなり周到な構成上の配慮と、文辞の彫琢が施されているように思える⁹。

五、「けり」のテキスト構成機能をめぐって―土佐日記を例に―

前節、前々節での考察から、物語・日記作品において「き」「たり」と「けり」が共起した際の叙述面での機能連関に関しては、次のような見取り図が描けそうである。

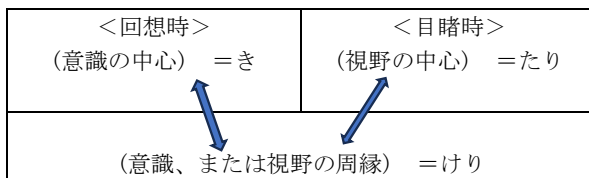


図2) 「き」「たり」「けり」のテキスト構成における機能連関

すなわち、「たり」はめのまへ性を典型的に明示する語として、表現主体の表現時における視野の中心となる事態の述べ立てにあずかる一方で、「き」は元めのまへ事態の述べ立てとして、回想時における意識の中心となる事態の叙述を担う。そして、さきに見てきたように、「けり」はこれらいずれの助動詞との対比においても、その背景・周縁にあって、表現主体の意識にのぼったところの事態(さきに挙げた土佐日記や「このついで」の例)、あるいは視点を事態から離れた周縁部において、そこから認識された事態(竹取物語冒頭文や伊勢物語 67 段の例)を叙述す

るものとして機能しているといえる（今回「き」「けり」共起の例に関しては「このついで」の例を挙げるにとどめたため、論証不足のそしりを免れないが、管見の限りでは多くの「き」「けり」共起の例がこの図式で説明できるものとみられる）。この図式からも、「けり」がめのまへ・非めのまへ双方の事態の述べ立てに対応していることがみてとれ、第二節で述べたような両属的性格が看取されるのである。

これを踏まえて本節では、土佐日記を例に「けり」のテキスト構成上の機能につき検証を行いたいと思う。本作品は短いながらも「けり」が多様なあり方で多用されており、その構造が見やすいからである。

まず土佐日記の「けり」の出現傾向につき、大まかなところを述べると、

- 1) 和歌の前後において、その詠作の背景となる出来事を叙述する個所に集中、かつ連続的に現れていることが多い。とりわけ前半部（一月二十九日条まで）の、「歌語り」的場面に集中的に現れる。
- 2) 他の個所では出来事そのものの叙述にあずかる「けり」は少なく、多くは事態に対する
 - a) 気づき
 - b) 背景説明
 - c) 客体化
 - d) 概念化のいずれかを示すものとして機能している。またそれらは単独で現れるケースがほとんどで、連続的な使用は少ない。

以上の点が指摘できる¹⁰。今、1) のケースを典型的に表す箇所を挙げてみる。

廿六日。なほかみのたちにて、あるじしののしりて、郎等までにものかづけたり。からうた、声あげていひけり。やまとうた、あるじもまらうどもこと人もいひあへりけり。からうたはこれにえかかず。やまとうた、あるじのかみのよめりける、
みやこいでてきみにあはんとこしものをこしかひもなくわかれぬるかな
となんありければ、かへるさきのかみのよめりける、
しるたへのなみちをとほくゆきかひてわれににべきはたれならなくに
こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。（十二月二十六日）

「なほかみのたちにて・・・」と「からうたはこれにえかかず」以外の文では全て「けり」が表れている。和歌に関する記述の前後に「けり」が頻用されることが明瞭にみてとれる例である。一方、2) の a) から d) に相当する例は以下の通りである。

2-a)

- ①けふ舟にのりし日よりかぞふればみそかあまり九日になりにけり。（一月三十日）
- ②五年六年のうちに千年やすぎにけむ、かた枝はなくなりにけり。（二月十六日）

2-b)

- ③白散をあるもの夜のまとてふなやかたにさしはさめりければ、風に吹きならさせて海に入れてえ飲まずなりぬ。（元日）
- ④九日のつとめて、（中略）これからたがひに国のさかひのうちはとて見おくりにくる人あまたがなかに、藤原のときさね、たちばなのすゑひら、はせべのゆきまさらん御たちいでたうびし日よりここかしこにおひくる。（中略）これより今はこぎはなれてゆく。これを見おくらんとてぞこの人どもはおひきける。（一月九日）
- ③は「え飲まずなりぬ」ることの背景となった事情を、また④は「この人どもは追ひ来」た事由を述べるものであるゆえに、あえて「けり」が使用されているものとみられる。

2 - c)

⑤これがなかに心ちいたくなやむ船君いたくめでて、「船酔ひしたうべりし御かほには似ずもあるかな、といひける。」(二月六日)

⑥廿五日。かみのたちよりよびにふみもてきたなり。よばれていたりて日ひとひ、夜ひとよ、とかくあそぶやうにてあけにけり。廿六日。(以下略) (十二月廿五日)

⑤については後述する。⑥の「けり」は、ある場面についての叙述の末尾に位置し、いわばその場面の閉じ目と次の場面への転換点を示すものであるが、このような「けり」は蜻蛉日記にも見られる。

寝待の月の山のはいづるほどに、いでむとする気色あり。さらでもありぬべき夜かなとおもふ気色やみえけむ、とまりぬべきことあらば、などいへど、さしもおぼえねば、

いかがせん山のはにだにとどまらでこころも空にいでむ月をばかへし、

ひさかたのそらに心のいづといへばかげはそこにもとまるべきかな

とて、とどまりにけり。さて又、野分のやうなることして二日ばかりありてきたり。(天徳元年秋 41)

前後のセンテンスが非「けり」形の「あり」「たり」で終止している点に注目したい。なお第三節で挙げた蜻蛉日記の例における末尾の「けり」も同様に考えることができる。

2 - d)

⑦かちとりの心は神の御心なりけり。(二月五日)

⑧たちてゆきし時よりは来るときぞ、人はとかくありける。(二月十五日)

⑨かくいひつつゆくに、船君なる人、波を見て、国よりはじめて、かいぞくむくいせんといふなることを思ふうへに、海のまたおそろしければ、かしらもみなしらけぬ。ななそぢ、やそぢは海にあるものなりけり。(一月二十一日)

⑩廿一日 卯の時ばかりにふなです。みな人々の船いづ。これを見れば春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。(同上)

ここに挙げた諸例は、特に「AはBなりけり」の文型の命題文として現れる傾向が顕著である。すなわち、観念的な操作を施すことでAとBとの等価性に思い至った、というところからこのような文型をとるのであろう。それはまた、経験事態を他事象と結び付け、一般化して捉えることにもつながるものである。

以上は土佐日記の叙述のあり方に即しつつ、「けり」の使用傾向とその用法の実際についてまとめたものであった。ここでさらに、「けり」そのものの意味用法として、今少し一般化した観点からこれを捉え直してみると、土佐日記の「けり」そのものの用法を私は、大きく以下の三つにまとめることができるのではないかと考えている。すなわち、

- A) (伏在事態の) 意識化・焦点化 (いわゆる「気付き」の用法。今まで気づかなかった事態に焦点をあて、表現主体の意識にのぼったことを示す) ⇨2 - a) および b) に対応
- B) 対象化、あるいは客体化 (事態の現場より離れた視点から、ヨソ事として、事態を突き放して俯瞰) ⇨1) および 2 - c) に対応
- C) 概念化 (ナマの事態を観念的に操作して一般化) ⇨2 - d) に対応

このうち B) に 2 - c) とともに 1) を対応させたことについては説明が必要であろう。そこでは歌語りの姿勢で経験事態を対象化して「作歌の場」を述べ立てるという叙述態度がみてとれるからである。それは記主が親しく目睹した事態や、後述するように、記主自身の挙動までもがえて「けり」で叙述されていることから裏付けられることである。

ところで、筆者は「けり」の最も基本的な意味ないし機能は、ある事態を、表現主体にとっての「外来情報」として述べ立てるという点にあると考える（坂田 2010）。そこから、これに付随した属性のいずれが強く現れるかによって、土佐日記においては上に示した A) ないし C) の、派生義ともいえるべき意味機能が生じるのだと考えられる。

そもそもここでの「外来情報」に対しては、表現主体自身が新たに気付いた、あるいは認識を新たにしたことであれ、他者から聞き知ったことであれ、その内容に対する何らかの驚き、あるいは当該内容に対する「そぐわなさ」、換言すれば距離感が意識されるものである。そこから必然的に A) B) が生じる。また表現主体自身が経験したナマの事態を、そこから距離を置いて捉え、それを一般化した情報として観念的に操作・構成を行うならば、C) の概念化された内容の述べ立てとなるであろう¹¹。

最後に、土佐日記の「けり」の用法のうち、注目すべき点二つを指摘しておきたい。まず一点目、「けり」による事態の客体化の問題である。

これがなかに心ちいたくなやむ船君いたくめでて、「船酔ひしたうべりし御かほには似ずもあるかな、といひける。（二月六日）

かかるあひだに船君の病者もとよりこちごちしき人にて、かうやうのことさらにしらざりけり。（二月七日）

ここに挙げた例はいずれも、「船君」の挙動を「けり」が述べ立てているのであるが、そもそもこの「船君」とは記主にほかならない。記主である「船君」自身を突き放した視点から対象化、もっと言えば「異化」している。いわば「わがこと」を「ヨソ事」として述べるのであり、そのために「けり」が現れているものと考えられる。次に、今一つの注目すべき点に関して、まず例を挙げる。

廿日　きのふのやうなれば船いださず、みな人うれへなげく。くるしく心もとなければ、ただ日のへぬる数をけふいか、廿日、三十日とかぞふれば、およびもそこなはれぬべし。いとわびし。夜はいもねず。廿日の夜の月いでにけり①。山のはもなくて海の中よりぞいでくる。かうやうなるを見てや、むかし阿部の仲麻呂といひける②人は、もろこしにわたりてかへりきける③時に、船にのるべき所にて、かの国人馬のはなむけし、わかれをしみて、かしこのからうたつくりなどしける④。あかずやありけむ、廿日の夜の月いづるまでぞありける⑤。その月は海よりぞいでける⑥。これを見てぞ仲麻呂のぬし、わが国にかかるうたをなん神代よりかみもよんたび、今はかみなかしもの人もかうやうに別れをしみ、よろこびもあり、かなしびもある時にはよむとてよめりける歌、

あをうなばらふりさけみればかすがなる三笠の山にいでし月かも
とぞよめりける。（一月廿日）

ここで注意されるのは同一日の記述において、記主にとっての体験叙述の「けり」①と阿倍仲麻呂に関する伝承叙述のそれ②以降の「けり」とが、近接した箇所に見れている点である。体験時における気づきと、（以前から聞き知っていたであろう）過去の伝承という、表現主体にとって次元の異なる事態が同じく「けり」で叙述されており、読み手にとっては少々混乱を覚えるところである。このような「けり」の振る舞いをどう捉えればよいのか¹²。

これについては体験、伝承、いずれの「けり」も、脳裏にじっくりこない、異化の対象である「外来情報」として述べたてると、という線でひとまずは説明ができるのかもしれない。双方の「けり」ともに、述べたて事態に対する表現主体の心理的距離が感得され、他の個所の「たり」による叙述箇所との対照において、テキスト上の遠近法が構成されているとみることもできよう。

ただ、このくだりに関してはもう一つ別の事情を考慮に入れる必要があるであろう。ここで、上の引用本文中「(月) いで」が四か所にわたって現れていることに注目したい（二重下線

部)。そのうち三か所が「けり」を伴っているが、中でも「けり①」と「けり⑤⑥」を含む文は明らかに内容上対応しており、一方は体験時、他方は伝承時における「二十日の夜の月の出」を描写している。このように、「けり」を含めた措辞の類同性を利用してあえて叙述を重ね合わせることで、経験事態と伝承事態との意図的な混淆を狙ったのではないだろうか。それによって現在の記主の眼前にある事態の背後に、遠く上代の、それも唐土における阿倍仲麻呂の逸話が二重写しのように揺曳するのであり、読者の脳裏にもあたかも本歌取り歌にも似たイメージが喚起されることになるのである¹³。その際、経験・伝承の両事態にまたがる「けり」の使用、いわば「けり」による事態の重ね合わせは、重要な役割を果たしているものとみられるのである。

土佐日記の文の運びはこのように周到な配慮をもってなされているのであり、そこではまた、助動詞「けり」の機能も見過すことのできないものとなっているのである。

六、「き」と「む」による言語空間構成—源氏「雨夜の品定め」を例に

次に例として挙げるのは、源氏物語簿木卷の有名な、「雨夜の品定め」のくだりである。周知の通りこの場面は、光源氏、頭中将をはじめとした若い男性貴族たちが、各々女性論を繰り広げる箇所であるが、全体の構成に関しては、古く室町時代の一条兼良による註釈、『花鳥余情』が法華経における「法華三周の説」に倣ったものであるという指摘をしている。「法華三周の説」とは、深遠な仏教の教えを一般に理解させるために釈迦が、1、法説、すなわち仏の教えをそのまま説く、2、喩説、すなわち仏法を比喻を用いて説明する、3、因縁説、すなわち釈迦の本縁譚など、実際の出来事を通して教えを説く、以上三段階の過程を経て仏法を説く、とするものである。雨夜の品定め全体の内容と構成を見る限り、この三周の説の説き方にそれぞれ対応していると見られる箇所があるが、それぞれの箇所の文末表現に着目すると、まず、「女の、これはしもと難つくまじきはかたくもあるかな、と」（新大系本 34 頁 9 行目）から「ともかくも、たがふべきふしあらむを、のどやかに見忍ばむよりほかに増す事あるまじかりけり」（同 44 頁 2 行目、以下に挙げる用例に付された頁数は全て新大系本による）までは、理想の女性に関する一般論、各々の見解を直に述べる「法説」に相当する箇所とみられるが、そこでは、

いとさばかりならむあたりには誰かはすかされ寄り侍らむ。取る方なくくちをしき際と、優なりとおぼゆばかりすぐれたるとは、数ひとしくこそ侍らめ。（35 頁）

あしくもよくもあひ添ひて、とあらむをりもかからんきざみをも見過ぐしたらん中こそ契り深くあはれならめ、われも人もうしろめたく心をかじやは。（43 頁）

上のように「む」「じ」あるいは「べし」による叙述を基調としている。一般論であるから、品定め場には存在しない事態、しかもあえて現実世界に定位（具体的に誰々の話と）しない事態として、ここでは「む」の系列（「じ」は当然その否定であり、また「べし」は「む」より確度の高い「未めのまへ」事態の述べ立てを担う）によって述べ立てられているのである。これに続く、

「よろづのことによそへておぼせ。木の道の匠の、よろづのものを心にまかせてづくりいだすも、臨時のもてあそびものの、そのものとあともさだまらぬは、そばつきざればみたるも、げにかうもしつべかりけりと、時につけつつさまをかへて、今めかしきに目うつりてをかしきもあり。大事として、まことにうるはしき人の調度の、飾りとする定まれるやうあるものを難なくしづる事なん、なほまことのものの上手はさまことに見えわかればべる。

（44 頁）

ではじまる左馬頭の論は、工芸や芸道を引き合いに女性論を展開する、喩説に相当する箇所と見られるが、文末は基本的に動詞基本形が用いられている。ここで述べ立てられている事態ももちろん、さきほどの「む」述べ立て事態と同様、語りの場には存在しないものであるが、現実世界に定位可能な、確度の高い事態として（おそらく語り手の左馬頭はこれを、具体的な情景を、宮中や或る貴族の邸宅に実際存在する、調度品や屏風絵などを思い浮かべつつ述べたことであろう）非めのまへ確定系列の動詞基本形を用いて語っているのである。さらにこれに続く箇所、

「はやう、まだいと下臈に侍りし時、あはれと思ふ人侍りき。(46 頁)

で始まる各人の恋愛体験談を語る箇所は、因縁説に相当する箇所と見られるが、ここでは「元めのまへ」事態を表す「き」を基調にして叙述がなされている。このほかにも重要なのは、

・・・馬の頭、物定め博士になりてひひらきみたり。中將はこのことわり聞きはてむと心入れてあへしらひみ給へり。「(中略)」とて近くみ寄れば、君も目覚まし給ふ。中將いみじく信じて頬杖をつきてむかひみ給へり。(44 頁)

このように、雨夜の品定め地の文では「たり」および動詞基本形によって、その語りの場のさまが、語り手の眼前にあるめのまへ事態として描写される、という構造をなしているという点である。

以上をまとめると、雨夜の品定めは

{	詞	{	一般論＝「む」による叙述・・・・・・・・⇔法説
			比喩＝動詞基本形による叙述・・・・・・・・⇔喩説
			体験談＝「き」による叙述・・・・・・・・⇔因縁説
{	地	＝	「たり」による叙述

以上のような構造と、それを支える叙法によって成り立っているとみられるのであり、特に「む」叙述による一般論と「き」叙述による体験談、という対照は、第二節で示しためのまへ性に関する図式を念頭に置くことで、より明確になるものと思われる。このような点からも、テキスト解析におけるめのまへ性という枠組みの有用性もある程度裏付けられるのではないだろうか。

むすびにかえて

以上、平安朝の文学作品を主な対象として、めのまへ性という視点に基づきつつ、そこに現れた助動詞相互の機能的連関のありようについてみてきた。このような視点を導入しつつ作品を読むことで、物語の語り手、あるいは日記の記主の視点（さらにいえば視界構造）と表現意図に即した理解が可能となるのではないだろうか。

またこのような読みは、本稿において必要に応じて言及したように古典文学作品の講読を行う際にも有用であると思われる。本稿はそのためのささやかな一つの試みである。

付記)

本稿における古典文学作品の引用は、蜻蛉日記は岩波文庫本（今西祐一郎校注）に、他は全て岩波の新大系本に拠った。ただし表記や句読点など、若干改めた箇所がある。また蜻蛉日記と源氏物語の引用末尾に記した洋数字は、それぞれ依拠したテキストの頁数を示す。

注

¹ 代表的なものとして、竹岡正夫(1963)、塚原鉄雄(1976)、鈴木泰(1992)の諸氏の論考を挙げることができる。

² 以下、第一、第二、および第六節の内容は、坂田一浩(2020)で述べたものと重複する点が多いが、拙稿全体の議論の前提となるものであり、かつ当該稿は現時点では日本で閲覧するのが非常に困難である点に鑑みて、若干の加筆修正を施した上で本稿で再掲することとした。この点ご諒承願いたい。

³ 発話者の眼前にある事態を「めのまへ」と呼ぶ例は古代語の中にも多く見出される。

1) 来む世にもはやなりなむめのまへにつれなき人を葺と思はむ (古今 520)

2) 心ふかう思ひあがりたるけしきも、見ではやまじとおぼすものから、良清が領じて言ひしけしきもめざましう、年ごろ心つけてあらむを、目の前に思ひ違へむもいとほしうおぼしめぐらされて、 (源氏・明石 71)

3) まことにいふかひなくなりてはさせたまひて、後のみぐしばかりをやつさせたまひても、ことなるかの世の光ともならせたまはざらむものから、めのまへの悲しびのまさるやうにて、いかがはべるべからむ。 (源氏・御法)

ちなみに、古代語における「めのまへ」は、仏教的観念と結びついて、来世に対する「現世」を表す用法もあったようで、上掲の1)と3)はその例と見られるものである。特に1)の例では「めのまへ」に対されている「来む世」には非めのまへ事態を表す「む」が、また3)においても「かの世の光」が現れている節の末にやはり「む」が現れている点は、注意を要する。さらに江戸時代の著作ではあるが、『かざし抄』の以下の記述は、古代語におけるめのまへ性を考えるにあたって示唆的である。

うれしき事にもせよ、うき事にもせよ、いひ出さんとするに、まづ心にふかく感じてうちなげきたる詞なり、ただ今めのまへにある事にふれて外の感情を引いたしたる心あり、さて昔をも思ひ、行ききをもかね、一を見て二を思ひやり、面を見て心をしるたぐひ、みなあはれといふことをおけり、 (富士谷成章『かざし抄』「あはれ」の項)

⁴ 「たり」に関しては、明らかに非めのまへ事態を述べ立てていると見られる例は、管見の限り確認できない(ただし「～たらむ」のように他の助動詞が下接した例を除く)。なお以前から、テンス・アスペクト研究の視点によって「たり」の意味構造を明らかにしようとする試みがなされているが、その中で、中古語の「たり」に「経歴」の用法があったとするものがある。例えば国立国語研究所の公式ツイッター「ことば研究館」(福沢将樹執筆)では古今集の、

我やは花に手だに触れたる

の例を挙げ、「私が花に手を触れたことがあるとでもいうのか。指一本すら触れてはいない」と解釈した上で、「平安中期(10世紀～11世紀初)までの「たり」は、実は<経歴>、つまり「～したことがある」を表す場合も稀にありました。」と述べるが、私見によれば、この用例を経歴の用法とみるのはあたらないと考える。そもそも、

吹く風をなきてうらみよ鶯は我やは花に手だに触れたる

この歌の一首全体を見る限り、これは現場詠であると考えられる。すなわち、詠者の眼前にいる鶯に向かって、同じく目の前にある、風によって散る花を指差しながら、「見てみろ、私は花に手を触れているか？触れてないだろう。(散らしているのは風だ。だから、)啼いて恨み言をいうなら風に向かって言え」という口吻(現代語の例で言えば、例えば博物館などで、目の前にある展示物に触った、触ってないの押し問答になった時の、入場者と係員とのやり取りに近いであろう)である。表現の主眼は詠者の行為に関する経歴云々ではなく、「触れたる」対象である花に行為の痕跡が残っているかどうかである。だからこそここで「たり」が用いられているのである。この歌の表現は現場に即した、極めて即物的なものであり、詠み手自身の行為の経歴といった、観念的なものはこの歌では問題とならないであろう。したがってこれを経歴を示す用法とする

のはあたらない。このような「たり」もめのまへ性の事例として無理なく説明できるのであり、管見の限りでは、少なくとも古今集以前で明確に経歴の用法を示すとみられる「たり」は確認できない。

5 「む」のいわゆる婉曲といわれる用法も、めのまへ性の概念を援用すれば比較的すっきりと理解できる。

上も見給ひて、「いづれも劣りまさるけぢめも見えぬ物どもなめるを、着給はん人の御かたち
ちに思ひよそへつつたてまつれ給へかし。・・・」とのたまへば、（源氏物語・玉鬘 368）
これは光源氏の邸宅、六条院に住まう女性たちに新年の装束を配る、いわゆる「衣配り」の場
面での紫の上の発言であるが、「着給はん人の」以下の現代語訳は新大系本によれば「お召しに
なるお方のご器量に似合うようにそれぞれ見立てておあげなさいまし。」となっている。ここで
「着給はん人（＝お召しになるお方）」、の連体修飾節に「ん（＝む）」が使用されているのは、
女性たちが装束を「お召しになる」事態がこの時点ではまだ実現されておらず、したがって話
者はその場面を想像しながら指示を出している。つまり「未めのまへ事態」だからである。

6 「事実未確認の事象に対する確信的断定」（工藤真由美（2014）、113 頁以下）。筆者は事態を
確定的に、一般化して述べるところに動詞基本形の機能的特質があると考えている（例えば枕草
子 33 段にその典型がみられる）。また、この問題については拙稿（坂田 2011）において平安朝
屏風歌詞書にみられる動詞叙法の問題として述べたことがある。

7 同様の表現構造は、土佐日記より後の執筆にかかる源氏物語においても随所にみられる。
侍従の君、まめ人の名をうれたしと思ひければ、廿余日のころ、梅の花ざかりなるに、に
ほひすくなげにとりなされし、すきものならはむかし、とおぼして、藤侍従の御もとにお
はしたり。＜中門入り給ふほどに、おなじなほし姿なる人たてりけり。隠れなむと思ひけ
る＞を、ひきとどめたれば、このつねにたちわづらふ少将なりけり。寝殿の西面に、琵琶、
さうの琴の声するに、心をまどはしてたてるなめり。（源氏・竹河 260）

ここで＜＞に入れた箇所が、その場面の背景を構成する伏在事態（具体的には隠れて垣間見し
ていた少将の挙動）であり、それを「ひきとどめ」た侍従の君、すなわち薫の動作は場面の前
景として「たり」で叙述される。そうして、続く「少将なりけり」で、＜＞内の動作の主が少
将であることがはじめて明かされるのである。なお源氏物語におけるこのような「けり」の機
能については、はやく竹岡正夫（1963）が「物語のあなたなる世界」を表す「けり」として、
多くの例を挙げつつ論証している。本稿もその線に沿うものであるが、とりわけ前景を表す
「たり」との機能的連携によって、それが効果的なものとなる点を重視するのである。

8 なお後藤康文（2022）はこの箇所につき「そのまま『今』としたのでは意味が通じない」と
し、「さ(左)」と「ま(万)」の誤写を想定した上で、「いざなどもいはでありしを」の本文を立
て、ここを男の動作とする。本稿は後藤の解釈の妥当性を、言語研究の立場から裏付けるもの
ともなり得るであろう。

9 ちなみに本話の後半では、男の言動が「けり」によって描写される一方で、姫君の言動は助動
詞が下接しない、用言基本形（裸形というべきか）を基本として叙述されている点にも注目する
必要がある。「裸」形である分、「き」よりもヴィヴィットに事態が描写され、語りにおいて、よ
り前景化した事態を述べ得るとみられる。前掲の塚原の論は「き」「けり」の対応には注目する
ものの、この基本形と「き」「けり」との関係に注意が払われていない点、片手落ちと言わざる
を得ない。ここで、それぞれの登場人物に関する叙述にどのような用言の形態が用いられている
かを簡単に対照させると、次のようになろう。

用言形態	用言基本形	用言＋「き」	用言＋「けり」
使用人物	姫君	男	子

表 1) 「このついで」第一話における、登場人物とその叙述形態の対応

¹⁰ 特に一月四日条以降は気付き、ならびに概念化の「なりけり」が多くみられる。この辺りを境に、本作品では叙述傾向にある種の変化がみられるのではないだろうか。

¹¹ 以上述べた A) ～C) は、表現主体が事態をどのように捉えているか、すなわち「事態の捉えよう」に関わるあり方だといえる。これらとは別に、「けり」に関しては聞き手あるいは読み手への働きかけ、すなわちそれを「新情報として」他者に伝えよう、知ってほしいというコミュニケーション的な側面も指摘できるであろう。これはいわば、「事態の伝えよう」に関わるものである。その点で上述の A) ～C) とは次元を異にする属性で、あえて項目として立てれば、α) 伝達志向性(他の伝達内容との差別化を図りつつ、注目すべき情報として特示しつつ伝える)ということになるだろうか。これについては別稿を期したい。

¹² これはまた、いわゆる伝承回想の「けり」と、「気付き」の「けり」との両用法をいかに統一的に説明するかという問題にも繋がるであろう。これについてはいまだ定説と呼べるものは提出されていないようである。ちなみに、掲出例中の「けり①」について、はやく富士谷御杖『土佐日記灯』は、それが記主の体験時における気づきである旨、次のように指摘している。「亥の上刻までも起められたるをなげきてにけりとはかかれたるなり。ねまほしくなるかと起められしほどに月いでぬとおどろきたる心ににけりとはおかれたるなり。さればおもひもよらず廿日の月のいでたる心をいふなりとしるべし。」

¹³ また、新全集本の注などが既に指摘するところだが、これに先立つ一月八日の条、「こよひ、月は海にぞいる」とここの条の「海の中よりぞいでくる」との対照叙法も考慮に入れる必要がある。八日条でも現場詠と、過去の在原業平の詠歌の重ね合わせがなされており、この点も両条に共通する筆致である。

参考文献

- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』 ひつじ書房
後藤康文 (2022) 『『このついで』 注解』 『北海道大学文学研究院紀要』 167
坂田一浩 (2009) 『『めのまへ性』 という観点の導入による、古代語助動詞の分類に関する一卑見』 『国語国文学研究』 (熊本大学) 44 号
——— (2011) 「平安朝屏風歌詞書の叙述様式—動詞叙法、とりわけ助動詞「けり」の使用をめぐる—」 『国語国文学研究』 (熊本大学) 46 号
——— (2020) 「古代語助動詞における『めのまへ性』」 『西日本教育研究』 特集号 (北方工业大学・中国北京)
鈴木泰 (1992) 『古代日本語動詞のテンス・アスペクト—源氏物語の分析』 ひつじ書房
——— (1995) 「メノマエ性と視点 (I) ——移動動詞の～タリ・リ形と～ツ形、～ヌ形のちがい——」 (『築島裕博士古稀記念 国語学論集』 汲古書院)
竹岡正夫 (1963) 「助動詞『けり』の本義と機能——源氏物語・紫式部日記・枕草子を資料として——」 (『国文学言語と文芸』 31)
塚原鉄雄 (1976) 「竹取物語の文章構成」 『中古文学』 17
——— (1979) 「堤中納言このついで——文構成の見聞集合——」 『人文研究』 (大阪市立大学) 31-9
森正人 (1979) 「堤中納言物語『このついで』 論」 『愛知県立大学文学部論集』 29
国立国語研究所・ことば研究館「古典文法では過去や完了の助動詞がたくさんあるのに、現代語ではなぜひとつしかないのですか」
<https://kotobaken.jp/qa/yokuaru/qa-68/> (最終閲覧日：2023 年 7 月 30 日)